

---

# **真・恋姫†学園～夏目のドキドキ学園生活～**

斬滅のザン&食べられる野草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十学園～夏田のドキドキ学園生活～

### 【Zコード】

N8426R

### 【作者名】

斬滅のザン&食べられる野草

### 【あらすじ】

主人公の夏目 夜雲<sup>なつめ やくも</sup>は今年高校へと無事入学を果たし悠々自適な学生ライフを送っていた。そして五月も下旬になつたそんな朝

『真・恋姫無双～夏候さん家の恩くん～』の学園版が始まること

始まる。

## プロフィール（ 3月 29日 設定追加）（前書き）

『いつもサンです。

学園版のプロフィールです。

『真・恋姫無双～夏候さん家の恩くん～』とは少し違つ点がありましたが、

それは学園版ですから。。。

# プロフィール（ 3月 29日 設定追加）

名前：夏目 夜雲

年齢：15 性別：男

身長・体重：176センチ 67キロ

容姿・上の下（隠れたイケメン、良く見ないと分からぬ感じ）

- 【髪色】
  - ・黒髪
- 【髪型】
  - ・セミロングで片耳を若干隠す感じ
- 【目の色】
  - ・茶色の目

性格・優しく人当たりが良く、動物や人が好き。

日向ぼっこが好きで、偶に授業をサボつて屋上で寝ている。

血液型：A B 一人称：オレ

所属：フランスエスカルボ高等部

好きな食べ物：料理全般

好きな物：動物、晴れ

趣味：昼寝、散歩

特技：運動、弓術

大切な物：友達、食べ物

苦手な物：勉強、我が儘な人

#### 備考

生まれて直ぐに両親はすでに他界。そのため今の夏田家へと養子として引き取られる。

中学2年に上がると同時に『洛甸寮』へと入る。

家族構成：実の両親は他界

養親（母親、父親）

養親の実の子（双子の姉妹）

## プロローグ（前書き）

どうもザンです。

短いです、それだけです。w

では本編です。

## プロローグ

ジリツー！ ジリツー！

「…………ん…………」

デジタルの目覚まし時計がけたたましく鳴り響きいつも迎える朝。目覚ましを止め、デジタルな数字を見遣る。

5月20日（金） 7：56

大きな2階建ての一軒家丸々寮に住むフランチエスカ学園高等部1Bの夏田夜雲、ことオレは108号室の白壁のモダンスタイルの自室のベッドで目を覚ました。

「ふあ～…………ねみい…………」

オレは1階に設置された洗面台で寝ぼけ面を洗い、寝癖を直し、自室に戻り制服を着て、食堂に向かつ。

「はよ～っす

片手を上げて食堂に入るとそれぞれ挨拶を返してくれた。

「…やくも、おはよー……むぐつむぐつ

メシでパンパンの口で挨拶してくれるのは、高等部1 Bの紅田恋。基本的に無口無表情だが、感情表現が上手くないだけであってけして感情が無い訳ではない（事実、恋の笑顔写真が学園内で高額取引されている…と言つ噂がある）。大食漢で動物が好き。部屋は101号室。

「おはよつなのです、夜雲殿ー。」

元気よく挨拶を返してくれたのは、高等部1 Bの公面 音々音。恋の従妹で恋（とオレ）を敬愛しており、大抵は一緒に行動している。その身体に似合わずアクロバティックな技が使える。得意技は、空中からの蹴り『ひんきゅーわーく』。部屋は102号室。

「おはよー! やれこめす、夜雲さん」

柔らかい微笑みで挨拶をして来たのは、高等部1 Cの董間 月。そのお淑やかさを体現したかの様な仕草・振る舞いはとても様になつている、それ故に多くのファンがいて、ファンクラブ（非公式）が中学校時代から存在。部屋は105号室。

「全く、遅いわよ」

開口一発から文句を言つのは、高等部1 Cの賈上 詠。月の幼馴染で月のことを大事に思つている。いつもシンシンして高圧的な態度だが、ドジな一面を持つ。部屋は104号室。

「おはよっせん、夜雲~」

ジンジャー・エールを飲んでいるのは、高等部1-Cの尾張 露。武道部・馬術所属。関西弁で猫の様なフリーダムな性格で若干百合が入ってる…かもしれない。部屋は106号室。

「遅いぞ、夜雲。全く遅刻したらいつする気だ」

凛々しい声で遅刻の心配してくれるのは、高等部1-Cの華藤 真。靈と同じで武道部所属。自分の武に自信を持っているが、良く決闘を申し込んでは負けている。正義感が強く、よく人の手助けをしている事が多くの人に見かけられている。部屋は107号室

「おはよー、夜雲君」

このにこやかな声で挨拶をしてくれるのは、寮の管理人の黄瀬 紫苑さん。この寮、『洛旬寮』の提供者。母性溢れる雰囲気でオレ達の母親的存在。母子家庭で苦労している。

「おはよー、夜雲お兄ちゃん!」

紫苑さんに続き元気の良い声で挨拶してくるのは、黄瀬 璃々(りり)ちゃん。紫苑さんの唯一の愛娘。この学園の幼等部に通っている。

ちなみに紫苑さんと璃々ちゃんは、寮の隣にある住宅に住んでいる。それと月曜日から金曜日は紫苑さんが朝食を作ってくれるし昼は言えба作ってくれる。だが土日は

「はい、朝食ですよ」

「あざーす！ こつもこつもすいませんねー」

オレはにこやかに笑いながら、お礼を言つ。

「ここによ、良く璃々の送り迎えや遊び相手をお願いして頂いていいのですから」

頬に手を添える様にしてにこやかな笑顔で言う、紫苑さん。

「いえいえこちらこそって感じですよ。それに、母親一人じゃ何かと不便ですから、男手は必要でしょ。これからも頼つてください」

「ふふふつ、そう言っていただけると嬉しいわ」

もどもとオレは子供が嫌いではない、どちらかと言えば好きな方だ。  
近所の子供とは偶の日曜日に遊ぶくらいに好きだ。

「任せてくれー！ んじゃ いただきまうぐえつー？」

「何してんのよ、食べる暇なんかないわ！ やつたと行くわよー！」

オレは詠によつて強制的に”食べ物への感謝”を中断された。  
襟元

これからオレの愉快な？日常が始まつた。



## プロローグ（後書き）

えーまあゆづくつ更新しますんで、よろしくお願ひします。

是非とも感想・アドバイスなどあれば宜しくお願ひします。

ではまた次回。

# 一曰三 朝1Jせながなが食べらー（前書き）

“えいせん”です。

なんだか部活から帰つて直ぐに寝てしまつた者です。

最近は部活に行くのも辛いですねww

まあこれは置いといて、では本編です。

## 1日目 朝1回はなんはかなりか食べろ！

オレは朝飯を食いつぱぐれ、体に力が入らないまま電車に揺られる。

「オレ達が暮らす」<sup>らくしゅんりょう</sup> 洛甸寮<sup>らくでんりょう</sup> は全部で8部屋。1階が女子6部屋、2階が男子2部屋（もう一つの部屋は建てつけが悪いらしい）。食事は大抵は1階にある居間でみんなと一緒にとる。紫苑さんは月曜日～金曜日まで朝食と夕食を作ってくれる。

「は、腹減った……」

電車に揺られること15分程度、オレ達が通うフランチェスカ学園都市<sup>元は学園だったのだが現校長より4代前ぐらいの人</sup>が学園都市として国からの特許を所得している。

幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まつてできた都市。これら学術機関を総称して「フランチェスカ学園」と呼ぶ。

一帯には各学校が複数ずつ存在していて、都市機能を含め、大学部の研究所なども同じ敷地内にある。敷地面積はバカに広い（新学期初めには迷子が出るほど）。そのため、学園内をブラブラと散歩す

る部「さんぽ部」というものがあつたり、クラス連中でも何人かが所属している。

多くの生徒が在籍していることもあつて、毎朝の通学ラッシュは鉄道・道路ともに大混雑を極め、たくさんの生徒たちが駆け足で登校しているシーンは朝の名物だつたりする。

「全くうるさいわね、さつきから」

昇降口前に来るとオレの「腹減った」発言がうるさいのか詠に一喝される。

「詠は知らないんだよ、朝メシを抜いたら人は死ぬんだよ?」

「そんな訳ないでしょ」

オレ達は今フランチェスカ学園高等部の門へと一直線に向かう桜並木道を歩いている。

「あの、良かつたら私の弁当、食べますか?」

「…月、いやつ月様……君はマイエンジエルだ!」

オレは感動のあまり月の手を握る。

「そ、そんな……くう…」

「月に何してんのよつ…!..」

詠の必殺の一撃、回し蹴りがオレの腹部へ、さらに拳がコメカミへ

と呑も込まれる。オレは、咄嗟の事で対応できず吹き飛ぶ。

「ぐはっ……」

「え、詠ちゃん！」

「ちゅう、やつ過ぎやで、詠っー！」

「見事な蹴りだな、賈上」

「…やくも、ぶじ？」

「夜雲殿……？ オ、お怪我はありますんかっ！？」

真と詠以外はオレの事を心配してくれた様で、少しうに駆け寄つて来る声と足音が聞こえる。

……ねね、ケガしていない方がおかしいって、あれ？ ケガしていない、ふっしーさー……

「お、重い一撃だ……だが……何とか無事だ……」

目一杯のやせ我慢をしつつ、ようめきながらもオレは起き上がる。

伊達に”地獄の訓練”に耐えたオレじゃねえぜ……

「…足めりぢや震えてるで？」

「む、武者震いつてヤツだ、気にするな……」

「そりゃか？ ウチには、生まれたての小鹿つて方があつとる気がするで？」

霞がオレの落ちた鞄を拾いながら囁く。

「大丈夫なんですか？」

「問題無い…行こう、そろそろH.Rが始まっちゃう」

オレはフラフラな足で昇降口へと向かう。

教室までは恋とねねが支えてくれてやつと席に着いた。それと同時に教室前方のドアが開き、一人の女性が入って来る。

「おはよう。出席を取るから返事をするよ！」

挨拶をすませ出席確認をするのは、周善寺冥琳<sup>しゅうぜんじめいりん</sup>。新任教師で初の担任を任せられた黒髪褐色美人教師、と学園内では意外に有名。

「はーい。みんなおはよう。今日も一日がんばる~」

ムードメーカー的な存在で、我がクラスの副担任である孫美雪蓮<sup>まごみしゃれん</sup>。

孫美家の長女で自由気ままな性格。冥琳の悩みの種。いちらもまた学園で有名。

2人はオレの母親の友達2人の娘さんで、幼い頃から一緒に遊んでいた、言わば幼馴染。ちなみに2人共20代前半弱で彼氏なし…らしい。

「うむ、全員いるな。今日は特に連絡事項はない、今日も勉学に励むよつ」

「それじゃ、体育の時間にね～」

と2人はHRを終え教室から出て行ってしまった。

「ようやく治まつた……」

オレは震えの治まつた足をさすりながら机に伏せる。

「…………やくも…」

「大丈夫ですか？」

すると恋とねねが机の端に手をかけ覗く様にオレの視界一杯に顔を出し、心配そうに見詰めて来る。

「おはよー夜雲くーん」

「おはよー夜雲」

「どうしたんだ、夜雲？」

「ふふつ、私が介抱してやるつか、夜雲？」

オレに声を掛け来たのは、個性的なクラスメート達（女子）。

まあ上から紹介と行こうか、まずは……

劉 桃香。幼等部からの付き合いで、将来凄い事をしそうな娘、普段から天然ボケの面が目立つが、意外に頑固な一面も持つ。調理部所属で良く料理を焦がしてるとか。

次に、関羽 愛紗。同じく幼等部から一緒に、委員長気質、委員長の中の委員長……とまでは行かないが、まあクラス委員長。武道部所属で全国大会上位ランカー、成績優秀、品行方正、で才色兼備の化身、料理で人が殺せる必殺調理人。

んで、馬渕 翠。中等部2年から一緒に、熱血スポーツティーア少女、頭がちょっと悪く単純なのが玉に瑕。武道部・馬術部所属で両方とも全国大会上位ランカー。男勝りだが恥ずかしがり屋。

そして最後に、竜雲寺 星。小等部5年からの一緒に、メンマ大好きヒーロー少女、人をからかうのが趣味特技。武道部・さんぽ部所属、武道ではまたまた全国大会上位ランカー。掴みどころのない雲の様なヤツで偶にエロくなる。

「……おつ……ちょっと、朝食くえなくて……な。それと星、どっか行け……」

オレは何とか起き上がり、椅子の背もたれにもたれ掛かる。

「おやおや、連れませぬなー」

何が可笑しいのわからないが、喉を鳴らして笑ひ星。

「……せー」

オレは心の底から嫌そつた顔をして星に言ひつ。

「ひどいですねあ」

「それで、大丈夫なのか?」

「…あー……3時間目に成仏…」

「孫美先生の体育か……真面目に受けても真面目に受けなくとも、か……」

愛紗は顎に手を置きながら思案顔になる。

「確かに、孫美先生は体育”だけ”は真面目にやせねからなー」

”だけ”を強調する翠。

「うふ、そうだねー、私には激しいから辛いよー……あうー」

思い出したように顔が少し青くなる桃香。

「アレぐらーが普通な気もするのだがな?」

星は真顔でそんな事を言ひつ。

「アレが普通って……星ちゃん……」

「流石にアレは普通じゃねーだろ、まああたしとしてはアホベリ一  
が丁度良いけど」

「一度にこつてのも変だと想ひみ、翠ちゃん……」

「まあ最悪、昼を食べるしかないだろ」

愛紗はもつともうじこ晝葉を囁つが、もつとも無理な発言をする。

「愛紗よ、夜雲は学食派だぞ……」

「うー、やうだつたな」

「しかも学食が開くのは、4時限目休み時間……どつもあつても  
難しいな……」

「しきも学食が開くのは、4時限目休み時間……どつもあつても  
すとそりで1時限目を告げるチャイムが鳴る。みんなオレに励ま  
しの声葉を残し、それぞれ自分の席へと戻っていく。

ようやく2時限目を終えた休み時間、オレは机に伏せたままで動け

ない状態だった。

「……め……めえ～……しげ～……」

もはや亡靈の様な声でじょんを求めていた。

「うわっ、もうお化けになつてゐる……」

「これは危ないですな。保健室に連れてていき、女性特有の介抱をすべきですな」

「女性特有の介抱？」

「さよひ。いつ胸をつかつた……」

「せ、星…卑猥だ！」

「冗談ではないか」

「お前は[冗談が分かりにくく]発言を控えろ…」

色々と聞こえるがオレは顔を上げる事さえできない。だがオレの席近くは賑やかな事この上ない事は分かった。

「……やくも、食べる…」

恋の声があると、唐突にオレの首が持ち上げられ口に何か詰め込まれる。

「…? むぐつむぐつ…」

むつ……これは、パン？　あ、ソーセージとレタス、それにマスター  
ドとケチャップ……って事は……

「むぐつ……んぐつ……ホットドッグ……」

「……せいかい……」

「くくくく頷きながら恋は持っていた実物を見せる。

「どうしたのこれ？」

「……一刀に…もらつた……」

「あー……一刀かー、良く持つてたなアイツ。確かに……Aクラスだつ  
たつけ？」

「……ん……はい……」

恋はホットドッグをオレの口にまた突っ込む。オレはそれをひたす  
ら咀嚼する。どこかオレを射殺す様な視線がオレを襲うが、恋との  
この空間では無効になつた。

「……ありがと、恋」

「……ん」

恋は照れたように微笑む。すると丁度チャイムが鳴り、教師が入つ  
て来る。するとオレの本能に呼び掛ける様に警報音をけたたましく  
鳴り響かせている。そして比例して数人の女性が黒いオーラ系の物

を発しているが、気にしない事にしよう。

授業中はずつと物凄い殺気を背中や肩、はたまた心臓にも感じながら受けたためか、汗が止まらなかつた。

「はーい、それじゃ一張り切つて行こうー

『 ସବୁ କାହିଁ କାହିଁ କାହିଁ କାହିଁ କାହିଁ କାହିଁ କାହିଁ କାହିଁ କାହିଁ 』

約40人強の男子は雄叫びにも似た歓喜の声を出す。オレ達は体操服に衣装チェンジして外で体育を始める。

「つたぐ、うせえ男子どもだ…」

「そつなぜこんなにもひるむかいのか」と言つと、女子はブルマと叫び、世界を探しても「」だけの服装だからである。それに雪蓮が教師にあるまじき露出度の高い服を着ているからでもある。そんな訳だ。

つたく何が嬉しいのかわからん。

「……やくも……一緒に組む……」

オレはボーッと雪蓮に群がっている男子の人垣を離れた場所で軽蔑の目で見ていると、恋がオレの体操服の裾を引っ張る。

「……組む？」

「……ん」

組むって言われても何をだ？

などと思つて面ると、恋の手を引っ張り一つの集団へと連れて行かれる。

「来たか」

そこにはブルマー姿の桃香、愛紗、翠、墨、ねねそれから。隣のクラスのAクラスの

「うこーっす、やくばー！」

「おはよう、夜雲。朝は大変だったらしいな

「全くダラしないわね」

「夜雲ー！」

「あ、姉者、落ち付けここは学校だ！」

んじゃ上から……

及川。変態、節操皆無、一つ名は上口の御遣い。

爽やかスマイルで男までも虜、と言つ噂がある、北郷 一刀。武道部所属で腕は中の中。オレの中学からの付き合いで親友のポジションを欲しいままにした男。

呆れ氣味に腰に手を当てながらため息を吐く、曹乃崎 華琳。容姿端麗、学業優秀、運動万能、才色兼備の言葉が似合う未来の生徒会長候補。オレの幼馴染で昔から1番つるんでいた人物。実家は旧家で日本ではかなり有名。

発狂氣味に暴れるのは、夏目 春蘭。華琳の護衛?らしい。運動万能で武道部所属の全国大会上位ランカー。華琳の家に仕える守護者的な家系の長女。そしてオレの戸籍上の姉である。

そしてその春蘭を羽交い絞めにしているのは、夏目 秋蘭。春蘭の双子の妹。才色兼備、学業優秀で武道部所属で全国大会上位ランカー。双子の姉である春蘭には外見も中身も似てない。戸籍上の二人目の姉。

「なあ……今酷い事言われた気がするんやけど?」

「そんなワケねーだろ」

「うーん……」

「それより、どう言つて」とだ、恋に組むつて言われたんだが?」

首をひねる及川を無視して華琳になぜこの状況なのか聞く。

「は？ 貴方、聞いていなかつたの？」

「何をだ？」

首を傾げながらわからぬと言つた顔をする。

「つまりだな

」「

すると一刀が懇切丁寧にわかり易く教えてくれる。

つまるところ、今から行われる球技は選択制でサッカー、バレー、テニス、野球の4つから選択して、その別れた競技をやるらしい。そしてその競技の時チームを別けるらしく、その組み合わせを決めるらしい。

「おくおく、了解した。んじゃ、オレは志達と組むんだな？」

「そんな訳ないでしょ、あくまで彼女は要望を言つただけよ、まだ決まってないわ」

「そうなのか？ んじゃサッサと決めちまおうぜ」

するとなぜかその場にいる女子の田つきが変わった。

「夜雲、当然私達と組むわよね？」

「わ、私達とだよね？」

「やくも、恋達と組む」

「つべんにオレに詰め寄る3組のグループ。だがこの3グループと組めば確実に何か嫌な事になる」と自分の中の第六感が告げていた。

「…………一刀、及川組むだーーー。」

「え? あ、ああ、いいだ…」

「なんや、やべー意氣地なしやなー」

「…………屋上から落とすぞ…」

オレは魔法の言葉を及川に満面の笑顔で囁く。この屋上から落とすぞ、は中学の時に気にくわない奴（カツアゲする奴、ケンカふつかけて来る奴 etc）を紐を両腕両足に縛つて落とした事があるからだ。

「すいませんしたーーー。」

及川はジャンピング下座をきつちり決める。この及川もその犠牲者（試運転の初搭乗者）だつたりする。

「んじゃ、オレ決まつたから…………つて恋、そんな田ざれても無理だからな…………」

「…………ちこ、え…」

可愛い舌打ちをする、いやむしろ舌打ちでない、がそこが可愛

いと思えるぜ。

「ま、まあ恋とねねぐらいなら良いんじゃないか？ ほら人数も2人だけだし、丁度5人になるし」

とそこで助け舟を出す一刀（と言つ名のお人よし）。

「お人よしは余計だ！」

「地の文を読むな、しかも最高難易の（）部分まで読むな。まあいい……まあ恋とねねだけならいいか……んじや恋とねねはこっちのチームな」

「……一刀、ナイス……」

「今日は褒めてやるのです」

「あ、あははは……」

なぜか一刀にサムズアップする恋と上から目線のねね。その一刀を睨む他の女子グループ。そして何故か汗をダクダク流す一刀が居た。

「んじや、始めるか……」

そしてオレ達は各チームに別れて準備運動をしてから選択球技のバレーをするために体育館へと向かつた。



# 一曰三 朝1Jせんはかなりか食べべー（後書き）

うーん、いい感じの苗字が思い浮かばないなー……

まあそんな感じで頑張つて書いています。

ではまた次回。ノシ

## 2日目 曇休みは屋上だねー（前書き）

「うこひこ、 じゅもサンです。

サブなんで結構遅いですが、 まあ見逃して下さいw

では本編です。

## 2日目 曜休みは屋上だね！

午前の授業をようやく消化し終えた昼休み。休み時間の比ではない程の騒がしい学食では無く、とても静かな屋上へとやって来た。

「つ～～ つ～～」

口笛を吹きながらいつもお決まりポジションである屋上の中央に位置する場所に座る。そして学食の横にある購買で買って来たパンを咥える。

「よし、誰も来てないな。これでオレの平穀は保たれる」

そう言つてパンを一口食べる。いつもこの時間は大抵はクラスのメンバーが居たり、月や詠それから霞に真といった連中と食事を食べる（強制的）のだが、今回は上手く避けた様だ。

「……何をしてる？」

「何つてメシを食おうとおもひつて、何でお前がここにいるんだよ！」

「！」

そこにはいつの間にかオレの横に立つて、黙然と言わんばかりに、黒髪のシーョン（お団子）ヘアーと春なのに黒いマフラーがトレードマークの褐色娘、甘城思春<sup>あましろ しづかん</sup>。クラスは1・D。武道部所属。急に現

れては消える忍者の様な技を軽々とやつて退ける様な女子。実は忍者の家系なのでは?といひ噂さえある。

「お前は急に出てくるなー 心臓に悪いんだよー」

「知るか、貴様の心臓など……」

「まつたく……んでも、今はまだしたんだ?」

「この頃、ここに来るとほぼ毎回思春に命が、それに何かとオレの悩み事を聞いてくれるいい奴だつたりする。」

「お猫様~」

「だが今回はほかの目的があるらしい。なにせこの「お猫様~」とか言つてるヤツが居るのだから。」

「…………また来てるのか…………」

「ああ、ここが良いスポットらしき…………」

目線を動かすとオレの座る逆側にその姿はあった。小柄な体躯に長い黒髪、そして猫を見て悶えている彼女、周央<sup>すおう</sup> 明命<sup>みんめい</sup>。クラスは1-D、部活は不明。彼女も思春の様に消えては現れるを特技にしている、学内1の俊足を持っているらしい。猫を神の一種と勘違いするほどの猫至上主義の持ち主。

「あそこにいる、初代猫教祖様はなに用でここにいる…………」

「何でもお前に渡す物があるらしい……」

渡す物？　はて、何か貰つ物なんかあつたか？

「ふーん……おーい、明命！」

兎に角呼びかけて用事があるなら聞かなければと思ひ、明命に声をかける。

「ふえ？　あ、夜雲さん…」

おこおい、気付いてなかつたんかい……

「どうしたんですか？」

するとオレに気付いた明命はオレの田の前に一瞬で来ていた。

「のわあーー？」

「はわあーー？」

それに驚いて声を上げると明命も驚きの声を出す。

「…………や、急に來たハビタクリするだろ……」

「す、すこませんー」

ペコペコと頭をなんでも下げる明命。口の様にとても素直かつペコアな娘なのだ。

「そ、そんなに謝らんでいいから。それより何か用があるんじゃない

のか？」

「あー、やつでした、これを……」

そつ言つて癪を探り出す明命。あれ?とかこつだつけ?とか言つて慌てている姿はまさに“和”の一言に似せる。

「……貴様……気持ち悪い田で明命を見るな……」

「あ、あは、あははははー……」

まあそんな田で見ればこの様に思春が何故かキレるので余り出来ないのだが。

「ん? 待てよ……」

「それじゃあ、思春なら良い訳?」

「…………」

なに?ー! 沈黙だと! 沈黙は肯定とみなしていいのだろうか?

恐る恐る思春の顔を覗く、すると何故か顔を赤くして湯気の様な物を頭から出していた。

「あー、ありましたー!」「れですー!」

と言つてきやいきやいと嬉しそうに笑いながら手紙を渡して来る。

「ん? ありがと。えーっと……」

貰つた手紙に宛名は無いが可憐べテコレーションされていた。その手紙をおもむろに開けて中身の手紙の内容を見る。

貴様の一生涯私が貰つて受けける

( . . )

( ) " パシパシ

( : . )

( ) " パシパシ

- - -  
( : . . ) ...?!

( ) " パシパシパシパシパシパシ

( )

( : - ) - -

達筆でそう書かれていた。涙が零れそつと目頭を押さえてもう一度文章を見直す。

貴様の一生は私が貰い受ける

同じ文章でした。

(。。。) ポカーン

((。;。。)) アワワワワ

((((。;。。)) ) ガクガクブルブル

(((((((。;。。))) ) ) ガクガクブルブルガタ  
ガタブルガタガクガクガクガクガク

オワタ-----  
!!!!

マジでなに！？ えつ！？ はつ！？ なんなのつー！？

オレ何したの-----

混乱して「ゴロ」ゴロとその場を転げまわる事数分。明命によつてようやく冷静になればオレはもう一度手紙を見る。

「ここの、貴様の一生は私が貰い受ける、つてオレ殺されるつー！」

「そうだ、落ち着け、クールだクールになれ、クールだ……よし、まずはタイムマシーンを探すんだ……」

「夜雲さん落ち着いてくださいー。」

それからまた数分。

「おい、裏になにかまだ文章があるぞ…」

今にも悪魔召喚の儀式でもしそうに屋上に何かの儀式陣を書いている時、思春がオレに手紙の裏を見せて来る。

そして思春から手紙を受け取り表に書かれた物騒な事の書かれた紙の裏を見る。

あはつ  
なんて嘘だよー……

冒頭の文書を見て手紙を下へと叩きつける。

「極めていい文章がくんじやねー！」

「お、落ち着いてください。続きを読みましょーうー。」

明命がオレの腰に抱きつき止める。

ぬ？　この感触は……慎ましやかなむりあべほん！？」

「……下種が……」

思春の攻撃がオレの頬を抉り吹き飛ばす。その一撃はとても重く、とても常人には耐えられざる攻撃だった。

さてそろそろ本題に戻ろう。

あはつ　　なんて嘘だよー。最近、お嬢様が夜雲さんに会いたい会いたいと駄々をこねるので、そろそろお嬢様に顔を見せに来てください。七乃より？

P・S 最初の驚く姿はまさに格別でした

「お前は、知謀スキルの無駄遣いじや、ボケ————！」

オレの怖がる様子はオマエには既に予測済みだつたと言つのか！  
マジで才能の無駄遣いじや、ボケ！！

このオレに手紙の送り主は、張ヶ谷 七乃。はりがや ななのある財閥の秘書兼メイド。頭は良いのだがその”知”を人を弄るために無駄に使うため、天然悪人と言われている。

「あの天然悪人め、オレを呼び出すたびにこんなモン使いやがつて……」

ふつふつと沸き上がる怒りを抑えつつ手紙をポケットに入れる。

「……まあいい、最近はあんまし行つて無かつたからな……」

と独り言を言いつつ手元のデジタル時計を見る。

「そろそろ時間になるな。明命、手紙ありがとな」

そう言つて明命の頭を優しく撫でる。

「はい！ えへへつ」

はうつ！？ カワエエやんけ！！

「思春もありがとな」

「…………」

ついでに思春の頭も撫でて屋上を後にする。それから教室に着くと女性連中に正座させられ説教された。

「なまじゅうや」――――――――――――



2日目 曇休みは屋上だね！（後書き）

うーむ、こんな感じでいいのかな？

まあいつか……さて次回は放課後ネタかな～？

んじゃまた次回。 ノシ

### 3回目 バイトは楽しいものー（前書き）

どうもザンです。

眠いですw

まあ頑張っても無いですがねーww

では本編です。

### 3回目 バイトは楽しいものー

アレだけ面倒だった学校も終わりを告げた  
ヤイムによつて。

チ

「終わつたー……んじゃ行きますか…」

「……ん

「ハイなのです！」

放課後。現在の時刻で丁度3時20分ぐらい。フランチェスカは以外にも早く終わる学校でこの時間に終わる事は不思議ではない。

「アンタ達、遅いわよー！」

恋達と昇降口を抜け正門まで前まで来た、すると詠と月の姿が見え少し小走りで向かつと、詠に文句を言われる。

「しゃーねーだろ。HRが少し長引いたんだよ」

「それだつたら走つて来るとかしなさいよ。」

ガルルルと聞こえそうな剣幕でオレの胸倉を掴む。

「…………おい、ちけーよ…………」

「つー? ふんつー?」

「りやなんしつー?」

詠の拳が鳩尾にクリーンヒットして仰向けに倒れ込む。

「……」ほつ、ほつ……い、今のは……やば……ヤバか、った……」

「ふんつー?」

咽ながら上半身を起します。詠はふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまひ。

「もひ、詠ちゃんたら。大丈夫ですか?」

「…………無事?」

「夜雲殿、大丈夫なのですか?」

「…………大丈夫だ…ありがとひ」

月はオレの背中の埃を払いながらオレが起きるのを手伝ってくれる。恋とねねはオレの傍にしゃがみ込んで心配そうな目でコッチを見詰める。

なんて優しい娘達なんだ！ 頭を撫でてやるわ。

「……ん

「くすぐったいです……」

「そ、そんな事無いです……へう……」

それぞれ3人の頭に手を置き1回づつ撫でる、3人共嬉しそうにしたり、照れたりと可愛い反応をする。そのおかげで体は大分楽になつた。だが

「月に触る なつ……」

「つりやぶつ……」

だが直ぐに顔が痛くなつた。

フランチエス力学園高等部の広い敷地を10分程度で抜け、しばらく欧洲風の街並みの中を歩きながら目的地へと駄弁りながら向かう。

「それにしてもアンタ、今日の休みどこで行つてたのよ？」

すると詠が唐突に話題を変える。

「ああ、ちょっとな…」

なんとか誤魔化そつと少しきじめられない笑顔で笑つて見せる。

「月と一緒に探しまわつたんだからねつー！」

「痛い！ 地味に痛い！」

詠も深くは氣いて来なかつたが、これでもかと喧うぐらいで怖い顔をしながら肘を抓られる。

「ふふつ、詠ちゃんも一緒に探してたんですね」

すると月が天使の笑顔で口元を隠して笑い、少し嬉しそうに囁く。

「なつー？ あ、あれは月の為よー勘違いしないでつて一いやいやするなー！」

詠は月の言葉をどもりながらも反論する、途中でオレのニヤケ面が気にくわないのか軽く蹴られる。

「……恋も、探した」

「ねねも探したのですぞ」

「ああ、すまんかった。ちょっと野暮用でな」

そつと書いて貰つた手紙をポケットから取り出して軽くヒラヒラさせる。

「何よそれ？」

「袁道寺家のメイドさんからの催促だよ。美羽ちやんが会いたいってさつ」

”袁道寺” 世界に誇る、超お金持ちでは無く、まあ日本の企業の御三家の一つである。多分野で軍事、商業、医療、政治など様々な分野で活躍している、事は確かである。そして、その袁道寺家と並び立つもつ2つの家は、”曹乃崎家”<sup>（さなきけ）</sup>、”薊家”<sup>（あさみけ）</sup>である。

そしてその袁道寺家と所縁ある曹乃崎家とは浅からぬ因縁（とつても浅いのだが）があり、現在では競う形で日本は急成長している。

そしてそして、その袁道寺家次代後継者の従妹である、袁道寺美羽にオレは大変気に入られて偶に御屋敷に招かれる（今回みたいに手紙が主である）。

袁道寺美羽。小等部4年生、袁道寺家次代後継者の従妹。少し上から目線、我が儘お嬢様で友達が少な目だが、他人を思いやれる心の優しい女の子。蜂蜜水が大のお気に入り（甘い物は全般的に好物）、意外に食通。

「ふーん。まあどうでもいいわよ、そんなの」

「お前から始まつたじゃねーかよ！」

「うつさいわね。それよりもう着いたわよ」

そんな感じであつて、という間（ここまでに30分）に到着した目的地は

『アルモニア』Armonia。Armoni

aはフランス語で調和と言う意味……らしい。外観はパリにある凱旋門通りにある様なオープンカフェ。

そんな場所でオレ達はバイトしている。

「ちーっす」

オレ達はそれぞれ軽い挨拶をしながら店内に入る。中は以外に人の数が少ない（8～9人程）店内を確認してこの店のマスター（オーナーの知り合い）である、桔梗さんに挨拶する。

いづかし  
厳 樅 桔梗。カフェ『アルモニア』Armonia のマスター。剛毅な性格で

大抵の事は気にしない、腕つ節が強く、ここら辺一帯では「厳の姐さん」とか「厳さん」などと呼ばれている。基本に人には友好的でお酒大好き人間である。そして独身……らしい。

「おう、来たか。今田も宜しく頼むぞ」

ニカッと活きの良い笑顔を向ける桔梗さん。

なにつ！？ それだけで揺れるの？ いててつ！

「夜雲、鼻伸ばしてゐる……」

恋はオレの耳を引っ張り拗ねた様に言つ。

「恋殿、鼻の下ではないかと思つのです……」

とか言つねねもオレの手の甲を抓つてい。

地味に痛い。

「はつはつはつ、それほど儂が魅力ある女だと言つ事じやー。オーナ

「ヤレで笑つてないで、助けてくださいよ」

「そのくらい自分でなんとかせい

そう言つてまた豪快に笑いながらお酒を飲む。

つて……

「「酒を飲むなつ！」

オレと詠の声が重なる。

アレからオレ達（恋・ねね・詠・月）はアルモニアの制服に着替える。オレの格好はウェイター服、白いシャツに暗い黒色の蝶ネクタイに黒のベスト、黒のガールソンエプロン（ショートバージョン）と言つた普通のウェイター服である。であるのだが……

「いらっしゃいませお嬢様」

と何故か執事の様な事をさせられている。この服でこれは合わないのでは?とオレは女性陣(アルバイト仲間)に聞くと、何故かみんながみんな鼻を押さえながらサムズアップをするか鼻を押さえどこかに行ってしまう。何故だろう?

しかもしかも、オレは何故か『不良ウェイター』と言つ、ウェイターにどうては不名誉であろう称号も有している事も言つておひづ。

アルバイト初日にオレはガラの悪い6人組のクズ(客と呼べと言わされたら、答えは否だ)をボコボコにして追い出した辺りでそんな称号を付けられた(桔梗さんから与えられた)。

そんなオレは今までこの店でアルバイトをしているワケだ。

「すいませんーん、注文いいですかー」

「あ、はい、今行きます」

そして今注文を取りに行つた月が身に着けているのは、メイド服だ。大抵の男はここで興奮するだろうが、オレはそんな事は決して無い。なぜならオレは ウェイター服(女性バージョン)の方が好きだからだ。

まあ落ち着け、誰もメイド服が嫌いでは無いさ、ただウェイター服が若干オレの好みと言つだけだ。

月が身に付けているのは、髪を止める赤い紐のあるカチューシャ、膝下までのスカートそしてその上から肩にフリルのあるエプロン、

和服の帯の様にお腹辺りに巻かれた濃いピンク色のリボンが特徴的なメイド服。

詠は赤い紐が無いが可愛らしいカチューシャ、肩にフリルのあるHプロン、お腹辺りに巻かれたりボンここまでは月と同じだが決定的に違う、丈の短いスカート。

この二人は前世でもメイド服を着ていたんじゃないかつて程に似合つている。

そして残り一人。

まずは恋。恋は、ウェイター服。黒の蝶ネクタイに白のシャツとオレと同じオーソドックスな上、下は黒いミニスカートとそれに合わせる長さの白いフリルのエプロン。

そしてねねは、いつものおさげをポーテールの様に赤いビーズの突いたゴムで一括りにしている。後の服の細部は月や詠と同じ。

とまあこんな感じの服装でオレ達は仕事をしている。

「注文いいですか？」

「何なりとお申し付けくださいませ、お嬢様」

この口調はいまだに慣れたくは無いのだけれど。

「お疲れしたー」「

「おひ、また月曜にたのむぞ」

オレ達は夕方6時半を過ぎた辺りでアルモニアを後にする。そして5人で駅へと向かう。

「それにしても今日も多かったわね」

「やうだね」

今日の客足に少し口を漏らす詠、それをひょいとため息をついて同意する月。

「恋…お腹減った…」

「そうですが、ねねもお腹が減ったのです

恋とねねはお腹が減つて居るのか元気が少な目だ。

「オレの比率がおかしかったのは何故だ……その所為で疲れたぜ。  
ふあ～…」

オレも今日の客がオレばかりにオーダーをとる事に愚痴る。みんな

それぞれ話しながらゆっくつとした歩調で歩く。

「明日は休みだし今日はゆっくりできるわね。月、明日買い物行くんでしょうか？」

「うん、買いたいお料理の本があって、詠ちゃんも何か買つんだっけ？」

「うん、こりこりとね」

月と詠は明日どちらかに出かける様だ。

まあフランチエスカで買えない物はないだろ？

「恋殿は明日もバイトですか？」

「……ん。犬のお世話」

恋は何故かもう一つペットショップでバイトをしている。恋は元々がペットショップで働いていたのだが。たしかオレがアルバイトを始めると言つたらなぜか一緒にするとか言つてなしきずし的にあのアルモニアに来たのだった。

そしてオレ達は駅につくと言つたところ

「お？ 月達やん。偶然やなー」

「む？ むお。本当だな」

と、霞と真が駅前で切符を買っている所に出くわす。ここで洛旬寮

組がそろつた。

「今帰りか?」

「そやねん、今日は部活がはよつおわってな。やる事無くてな」

オレは券売機にお金を入れながら靈に聞く。すると今日は部活が早めに終わつたらしい。

やる事が無いって……健全な女子高校生かよ。まあ靈に健全を問つのは野暮と言つ物だな。

「ほないこか」

「お前が仕切るな」

「ええやん、細かいな一夜雲はー」

ぶーぶーと唇を尖らせる靈。こいつたのをオレ以外の男にやればワラワラと男が良い寄るのに、と思つが口にはしない。

そしてオレ達は電車に乗り込む。

「……ふう」

アレから紫苑さんの作った晩ご飯をこれでもかと言ひべらりに食べたオレは、自室に完備された風呂に入つてから、寝巻に着替えて自分のベットに腰を掛けてタオルで頭を拭ぐ。

今日はまあまあ充実した一日だった事をかるーく思い返してオレはタオルを肩に掛ける。

「ん？」

すると机の上に置いたケータイがバイブする。

そつ言えればまだマナーモード解除して無かつたつけ？

「うーーっす、三河屋ですよーっと」

ケータイをとりスマートフォンのケータイを耳に当てる[冗談を言へ。

え？ あ、すすすいません間違えました！

「ははは、ウソウソ。オレであつてるよ」

ケータイの向こう側はオレの声に慌てて謝る。その電話の相手は桃香だった。

あひひ～…もう酷いよ～夜雲くん

「わらいわらい。んで？ なんか用事か？」

謝りながらも桃香の慌てる顔を思い浮かべると微笑みが止まらない。  
あ、うん。明日お買いものに行くんだけど、夜雪くともどじうかな、  
つて？

「誰が行くんだ？」

えーっと、愛紗ちゃんに星ちゃん、鈴々ちゃんそれから難里ちゃん  
と朱里ちゃん…あ、あと白蓮ちゃんも一緒だよ

「……ず、随分と多いな……つか男はオレだけなんなんだな」

少し肩を落とし気味にオレはため息をつく。

あ、それなら一刀くんも呼ぶ？

「うーん、アイツかー……そうだな。OK、んじゃ明日は何時集合  
だ？ それと一刀にはオレが連絡すっから」

それから少し桃香に明日の集合場所と時間を聞いて、しばらく談笑  
してから切った。そして一刀にメールで了解を聞いてベットに倒れ  
込み、ものの数分で眠りに落ちた。



### 3日目 バイトは楽しいもの！（後書き）

最近は部活が激しくてこつちに体力が使えなくてすいませんww

まあ今回は軽くバイト話？

そんで次回は蜀組数人と買い物です！

ではでは次回。ノシ

4日目 人類最終兵器は家電だ……いえ、何でもないです…（前書き）

どうもサンです。

こっちは久しぶりに更新しますね。

では本編です。

## 4日目 人類最終兵器は家電だ…… いえ、何でもないです…

本日は日曜日。昨日約束した通りオレは、駅へと来ていた。

「10時17分…少し早く来過ぎたか？」

オレは駅前の信号が青になるのを腕時計を見ながら待つ。そして赤が青に変わりゆっくりと歩き出す。そして集合の印である“¢”型のオブジェ前を見る。するとそこには一刀が居た。

「うーっす、一刀」

片手を上げて挨拶した後に、軽く謝る。

「ワリーな付き合わせちまって」

「気にしないでいいぞ。どうせ今日は及川のナンパに付き合わされることになつてたけど。断るいい用事が出来たよ」

「さうか。それよりあいつらまだなのかな？」

一応周りをキヨロキヨロと見回す。

「うん、まだ。でもさつき「今出たから」って愛紗からメール來たし大丈夫だろ」

「あ、オレの所にも來てる。ま、これなら大丈夫だな、なんせ委員長だしな」

オレは笑いながら言つ。一刀も少し困つた様なそんな感じで笑う。それから程無くして……

「おはよ~」

と言う声にオレ達は談笑を中止して振り返る。そこには美女が4人、美少女が3人と物凄く男冥利に尽きる話この上ない、”成春寮”組の女性陣が来た。

成春寮 フランチエスカの西地区にある女子寮。現在は10人が寮に住んでいる、その10人ともが学生である。洛旬寮と同じく管理人の人が居る、だがウチと違い基本は寮に住む人が自炊をする形である。

本当に余談だが、洛旬寮は北側西寄りの場所にある。なのでこの駅から徒歩で30～40分程度で成春寮に着く。

「お兄ちゃん~」

オレに突進して来る”赤い魔弾”（オレ命名）こと、風張 鈴々（りんりん）。中等部3年生で愛紗達の居る武道部中等部の猛者である。独特の雰囲気と可愛らしい口調、明るく元気な性格も相まって学園での人氣者。

「おひと。おひと。今日も元気だなー 鈴々」

「元気一杯なのだー」

飛びついて来た鈴々を降ろして頭を撫でる。鈴々は丁度頭を撫でる最適の場所に頭があるのでついつい無意識で撫でる事がある。

「お、おはよー」「わーましゅー！　はい、噛んじゃいました……」

「お、おおはよー」「わーましゅー……あひ……」

「おはよ、相変わらずだな」

はう、と言ったのが、諸羽 朱里。あう、と言ったのが、鳳桐 離里。一人共中等部3年生で鈴々と同じクラス。朱里とは小等部1年生の頃からの付き合いで、離里とは小等部4年生からの付き合い。フランチエスカの”伏龍鳳離”と言えばこの2人、と学園ではそれなりに有名である。

「（はわわ…！／あわわ…！）」「

「ははっ、それも相変わらずだな」

オレは朱里と離里の頭を撫でる、2人は慌てた様な声をだす。

「はあ、それくらいにしてやれよ夏田」

ため息を吐いてオレの行動に釘をさすのは、公原 白蓮。桃香から紹介された桃香の親友。特筆するべきところなし、が特徴。

「こま普通つて言われた氣がしたれ……」

「あ、氣の所為だろ……それより、行こうぜっ。買つもんあるんだ  
るへ。」

「やうだな

愛紗の言葉を皮切りにオレ達は駅内へと歩き出す。

「なんか納得できなこぞ……」

「まずはどこから行くんだ?」

オレ達は電車で20分程揺られた場所、フランチエスカの中心地区である、店や会社が密集する区画の巨大なショッピングモール内へと入る。中に入ると、大きく“十”の刻まれたタイルに少し高級感のある造り、ガラス張りの丸いエレベーターのある内装、商品の置かれた棚には春物の最新のファッショングッズ、皮靴やスーツ、などなどが並んでいる。その中をそれぞれ喋りながら目的の場所へと向かう。

「それより何を買つんだ?」

「あ、うん。この前料理に失敗しちゃって、電子レンジ壊しちゃ

だから」

桃香は可愛らしくペロッと舌を出して言ひ。『いつ仕草は似合つと言ひか、可愛らしき、のだが料理で電子レンジが壊れたとは何を”合成”したのだろうか。

「そ、そ、うか。いつかオレにも何か作ってくれよ」

「え? う、うん」

桃香は顔を赤くして俯いてしまつ。

「わ、私だつて料理くらこできませんー。」

するとセシに愛紗が入り込んでくる。

「いやつ知つてるわ…… あ、まあ機会があつたら食わせてくれ。しつかり味見してな…」

オレは愛紗の殺人料理を、中等部の時に初めて実食した人間ひけんたいだからな。

「はい」

「お前は勇者だな…」（じい）

「愛紗を泣かしたら、愛紗のオヤジさんに殺されるかんな…」（じい）

「それでは私も秘蔵のメンマを御馳走して差し上げよ!」

いつの間にかオレと一刀の会話に聞き耳を立てていた星は白蓮が二言。

「あ、それは遠慮するわ。ってか、お前が作ったワケじゃやねーだ  
る」

「〇二二」

ガツクリしている星を置いてオレ達は目的の場所、である家電製品  
売り場へと来た。

「えじやとつとと済ませて次行」  
「ぱぴ」

せつして桃香、愛紗、白蓮、朱里、雛里は商品が並べられた方向へ  
と行ってしまった。

「どうすっか？ オレは適当に商品眺めてるけど」

「俺も行くよ」

「私も一人では暇ですからな」

「鈴々はお兄ちゃんについて行くのだ」

と言つて鈴々はオレの背中をよじ登り肩へとひつ付いて来る、所詮  
肩車をしている。

「えじや適当に見て回つかな」

オレは適当な電化製品を見始める。そこには、先端に人差し指くらいの大きさの円盤みたいな物が付いて居て、ギザギザしている、その先端から持つ所まで細い銀色のフォルム、持つ所は白く数個程のボタンがあるて、最後に尻尾の様なコードが付いている。

「これは、電化製品なのか？」

「ああ、ミキサーの進化版だよ、ほら先端に刃が付いてるだろ？  
そこでモノを碎くんだ」

「ふうん、人類も進化したな」

「進化したのだ」

「お前等なあ……はあ……」

オレと鈴々は感心したように頷く、すると一刀が顔を抑えてため息を吐く。星は近くに蹲つうすくまて笑いを堪えていた。オレはそれを無視して適当にダラダラと家電を見て回った。

「んじゃ次は誰だ？」

「は、はいっー」「

アレから20分程して桃香は最新式の電子レンジを購入した。そして次の行く場所をみんなに聞くと朱里と離里が手を上げる。ちなみに購入した電子レンジは成春寮に運ばれる事になっている。

「何を買つんだ？」

「ほ、本でしゅ……はう……」

「焦んなくていいっての。時間はまだまだあっから」

オレは俯く朱里の頭を優しく撫でる。

「ま、本だな。んじゃ行くぞ」

そしてオレ達はショッピングモール東側にある本屋へと向かった。  
その途中……

「ん？…………穩じやねーか？　おーい！」

「…………あ～夜雲くんじゃないですかあ～」

しばらく歩いていると、東側へ向かう途中、知り合いを見つけて声をかける。するとのんびりとした口調でこっちに手を振つて来る。

「あれは？」

「ああ。孫美家繫がりの縁の人」

そう言つてオレは彼女へと近付く。陸上<sup>くがうえ</sup> 穩<sup>のん</sup> フランチエスカ大学の2回生で雪蓮と冥琳の後輩。将来の夢は作家らしい。

「どうしたこんな所で？」

服装は非常にラフな格好。それでいて女性らしさを引き出している。「バイトを探していたんですよ。夜雲くんはどういった用なんですかあ？」

「オレはダチと一緒に買い物だよ。それよりなんでバイトなんだ？奨学金が出てたら、足りないのか？」

記憶が確かなら結構な奨学金を受け取っていた筈。

「はい。ちょっと欲しいモノが出来ちゃってですねえ」

「ふうん。女の子は金が掛かるんだな」

オレは相槌を軽く打つて頷く。

「それよりも、お友達と一緒に待たせていいんですかあ？」

「うーん、そうだな。悪かったな声掛けで。んじゃ頑張れよ」

「はい」

オレはそう言い残して一刀達の下へと戻った。それから少し穏の事について數十分問い合わせられたが、特にこれと言つて何も無い事を理解してくれた。



4日目 人類最終兵器は家電だ……いえ、何でもないです…（後書き）

うーん?

なんか不満が残る感じですが、

こんな感じになりました。

次回は脛の部辺りです。

ではでは次回。ノシ

5日目 買い物中の女の手をつかっこ……？（記録モ）

「えりちゃんですか。

『最近は何だか少しに向かってると眠くなります』

では本編です。

## 5日目 買い物中の女の子はかしましへ……？

朱里達の買い物を終えた辺りで1・2時を軽く過ぎたので、オレ達はフードコートへと来た。時間帯的にも混んでいると思ったのだが。オレ達は意外とすんなりと席を確保することができた。そしてそれぞれ思い思いの料理を求めて、一旦解散する。

「いただきます」と

一足先にオレは手を合わせて、食べ物への感謝をしてからスプーンを取つて食べ始める。今日のオレの昼は、”ふわふわチーズオムライス”のセットのメインである、文字通りいふわふわと黄色い卵、その上に白い溶けたチーズのオムライス、揚げ立てのポテト、そしてウーロン茶と言つ何とも贋やつな物だった。

「…………つまつー」

じっくりじっくり咀嚼してから感想をある程度のボリュームの音量で言ひ。幸い近くに座る他の客はフードコート独特の喧騒で聞こえ

ていな様だつた。

「 いただきます」

すると隣から声が聞こえる、オレは当たり前の様にそっちは見る。するとそこには星が……

「 いつも通りだな」

星とこんもりと、びつさつと、もりもりと椅子に座る星の頭を超す勢いの大量の茶色いモノ メンマのつたラーメンを見て、そう呟く。

星は生糀の快樂殺人鬼並みに、本能で動く獣並みに、メンマ大好きな少女なのだ。

「 つてか、どうやって」

そのメンマ山を崩さずにここまで持つて来たんだよ。ものすりぐく氣になるし、物凄い見られてる。

周りを見ると、料理を運ぶトレイを持った通りすがりの老若男女から、座つて食事していたお客、はたまた店の店員さんまでも、星の前にあるメンマをガン見している。

「 つたぐ。お前の胃にどれだけ入るんだよ……」

そつ呟いてオムライスを一口食べて。

いかん、見てたら”コレ”が見えなくなる。

それから私は無我夢中でオムライスをかつへり。しばらじして食べ終わったトレイを片付けに行く。すると朱里と雛里の姿が見えた。

「朱里、雛里」

「あ、夜雲さん」

オレはトレイを片手でぶら下げる様に持つて、2人の名前を呼んで近付く。

「どうした、まだ決まんねえのか？」

「い、いえ。決まっているんですけど……はう……」

歯切れ悪く朱里は恥ずかしそうな声を出してシュンとなる。オレはその理由がわかると、朱里と雛里の頭を鬼に角撲でてやる。

「元気だせつての。オレも一緒に居てやんよ」

2人は極度の緊張に弱い、世で言う”恥ずかしがり屋”なので、こう言つたゴミゴミとした人ごみは1人では怖くて歩けない、と言う萌ポイントを有しているのである。何とも可愛らしい事この上ない。

「…はう……」

「…あう……」

オレは一旦トレイを片付けてから、朱里を左手、雛里を右手に手を繋ぎながらそれぞれの列へと並ぶ。それから数分で料理を受け取つ

てから確保してある席へと戻る。

「……良く食うな……」

オレは感心しているんだかいないんだか、そんな良く解らない顔で、自分から右斜め前に鈴々の居る場所を見る。そこには嬉々とした表情で無我夢中に丼を搔きこんだり、啜つたり、飲んだり、嚙んだりと忙しそうにメシを食べている。

「ま、鈴々らしくないやうしいな」

オレは肩肘を机について割と嬉しそうな表情で笑う。

昼食も滞りなく（鈴々が大量に食べた以外）終了して、女の子ほぼ全員の行きたい場所であるところの、ファッショソの一角へと来た。当然の如くここ4階全てが女性物のフロアなので、男は居心地が悪い。そんな場所で女の子たちは気にする風も無く、キヤイキヤイと言つ感じに嬉しそうな声を出しながら買ひ服を吟味している。

「ふう……」

「はあ……」

オレと一刀は当然その集団に入る勇者ではないので、店の前に設置されたベンチでダラツと座っている。

「そう言えば、お前この前の中間じつだつた？」

唐突に一刀がオレの方に顔を向けて聞いて来る。

「ああ、あれな…。えーっと……壊滅的とだけ…」

「ははっ、予想通りだな…」

苦笑いの一刀に、お前は？ と聞いて見ると。

「そうだな、平行線上かな？」

「お前も変わらねえな。そう言えば、恋は珍しく勘かやまかが当たつて全部80点台取つてな。あれは凄いぜ…」

「それは天文学的数字じゃないの？」

「そりかもな。…そうだ、華琳はどうだつたんだ？」

「予想通りなんじゃない？」

「ま、流石は生徒会長候補の有力株だな」

オレは頷きながら目線を目の前の店へと向ける。当然そこには桃香達が服を持って、可愛い～とか、愛紗ちゃんに似合つかも～とか言って現代女子高生の模範を示している。それが少し微笑ましくてオレは頬を緩ませる。

「顔がエロいぞ……」

「オーケー 一刀、貴様とは一度身を持つてオレと語り存在を教え込んでやるつ……」

肩を回しながらベンチから腰を上げて構えを取る、全神経、全筋肉を一撃に込める様に構える。

「その腐った脳みそをブツ殺す！－！」

そして閃光の様な一撃を放つ。

「……ぐふつ……」

「ふん。腕が落ちたな 一刀」

そういつて、一刀（と言ひ名の屍）を背景にガツッポーズをとる。

「終わつたよ……つてなんじやこつや－－？」

桃香が大き目の紙袋を持って嬉しそうな笑顔を浮かべて来たかと思うと、後ろに居る一刀を見て驚いた表情になる。そしてそのまま可愛い声で絶叫する。

どうやら一刀との死闘（一方的なリンチ状態）を繰り広げている内に、女性陣は買い物を終了させてしまつたらし。

「気にするな桃香、必要な犠牲なんだ」

「え？ え？ う、うん」

オレの「冗談を本気で受け止めている辺り、桃香は詐欺に容易に引っ掛かるタイプであることがわかる。……とつこの昔に知っているのだけど。

「……一刀、帰宅部に負けるとは……」これは”特別メニュー”だな  
そつ弦く愛紗。特別メニュー？ はて何があるんだろう？

「特別メニュー」とは、愛紗が考案した三日三晩の断食、その三日間は”木鉄拳m k<sup>2</sup>”との連続18時間の鍛錬をする事ですな」

オレの心を読んだ様に説明をする星。

「心を読むな」

「いえ、そう顔に出ていたものですから……」

「オレは今無表情だった」

「愛の力です」

手を頬に添えて嘘っぽくポツと赤くなる星。

「は？」

それを鼻で笑つてやる、すると星は膝をついてオーバーリアクションとも言えるポーズをとる。

「〇〇」

「……ま、説明は感謝。分かり易かつたぜ」

オレはそう言って微笑みながら手を差し出す。すると星は顔を背けながらもオレの手を取つて立ち上がる。

「これで最後だよな。んじゃ帰るか」

するとまばらに、それぞれが返事を返してくれた。しかし本日の買い物を終了した。

アレから電車に揺られながら帰ったオレ達。電車の中では数人（鈴々・桃香・愛紗・離里）は寝てしまっていた。オレの両肩を占領したのは離里と桃香だと囁くのは蛇足だ。

電車が待ち合わせした駅に着き改札を出てからオレ達は別れた。それからしばらく行つた場所にあるコンビニへと入つた。

「今日は詠とねねの当番だつけ。ま、珍料理は出来んだろ」

そう言つてコンビニに常備されているカゴを手に取つてから飲み物

コーナーへと行く。そしてジンジャーホールの大きなペットボトル、同じ大きさのオレンジジュースとウーロン茶をカゴに投げ入れる。

「ん？ 霞からだ……つてこれだけですか？」

次にお菓子コーナーへ行こうと身体を回転させた時、ケータイからピロピロと警戒な音楽が流れる。ケータイをポケットから取り出しディスプレイを見るとメールが一件来ていた。開いて見ると霞から短文で”ジンジャー”と書かれていた。

「”購入”つと」

こちらも短文で”購入”とだけ打ちこんで送信する、送信完了の文字が出てから直ぐにケータイをポケットに押し込む。

「……もう一本買つとくかな」

オレはお菓子コーナーに向けて居た身体をまた回転させて飲み物の棚からジンジャーエールをカゴに入れる。そしてお菓子コーナーへ向かう。そして適当に、尚且つ、吟味しつつお菓子をカゴに投げ込んで行く。

「こんなもんか」

意外に多くなつちまた、と呴いてまあいかと思いレジで会計を済ませる。そして洛甸寮へとゆっくり歩いて行く。明後日には通学路として使う事になる、夕焼けが綺麗な坂道を登り。平坦な住宅街を抜けてから寮に着いた。

「ただいまー」

明日は美羽ちゃん家にでも行くかな。

## 5回目 買い物中の女の子はかしまじこ……？（後書き）

今回は前話のつづきでした。

こんな感じで良かったんだろうか？

つて思いますけど、大丈夫でしょう！

と言つ何処ともなく湧き出る自信を信じて投稿しましたww

ではまた次回。ノシ

## 6回目 豪華な屋敷は迷路と同じ（前書き）

いつもサンです。

いやー、いつも久しぶりの更新ですね。

お待たせしてすいません。まあ待ってる人が居るのかは不明ですが

……

では本編です。

袁道寺家・曹乃崎家・薊家 これら3つを御三家と呼ばれる。御三家は江戸時代から続く日本を支えて来た家系。その権力は江戸時代から現代に至るまで衰亡する事無く興隆し続けて現代社会を大きく支え活躍している3つの家系である。

その御三家の一家とオレは大きな繋がりを持っている。まずは”曹乃崎家”だ、曹乃崎家の次期後継者である曹乃崎華琳とオレは幼馴染なのだ。そしてその曹乃崎家を江戸時代から守護して来た家系こそがオレの苗字にある”夏目”なのだ。

夏目家は代々曹乃崎家を護り繁栄を支えて来た影の功労者。そんな歴史ある家系にオレは家族として迎え入れられている。元々夏目家は宗家と分家があり、オレはその分家の者として家系図に記されている。

そしてオレには両親が居ない。父親はオレが生まれる前に事故で他界、母親もオレを生んで数ヶ月して他界。元々母は身体が弱く子供を産める身体では無かつたらしい、だが母たつての願いによりオレは出産され、分家最後の者となつた。

だが戸籍上でオレは、宗家の現党首の妻の”息子”となつてゐる。コレは夏田家に代々忌まわしき伝統<sup>のりい</sup>が関連しているからである。

その伝統<sup>のりい</sup>とは夏田家は宗家と分家の一族間<sup>いっしやくかん</sup>でのみ子を為す、と言つ現代の法律を逸脱した伝統<sup>のりい</sup>を交してゐるのだ。一族でのみ子を為すことで種としての高い力を得る、とか何とかそんな独自理論を信じ、現代までその伝統<sup>のりい</sup>を守つてゐる。

だから分家最後の一人であるオレを宗家は自身の次期後継者である娘の春蘭と秋蘭のどちらかとくつ付ける事に執着してゐる。だからオレはそんな伝統<sup>のりい</sup>が嫌で家を離れ寮で暮らしてゐるのだ。

#### 閑話休題。

もう一つの繋がりがあるのは袁道寺家である。袁道寺家とは華琳の付添いとして六歳の頃に袁道寺家主催のパーティーの席で出会つたのだ。その頃のオレは世辞としても社交的とは言えなかつた、だが特別人見知りとい訳でもなくただ華琳に腕を引かれながらパーティー会場を連れ回されたのだ。

そんな時にオレは華琳に紹介されて袁道寺麗羽に出会つた。華琳の幼馴染だつたからか、歳か同じだつたからなのかよく解らないが、麗羽とは直ぐに打ち解けられた。それからは麗羽にある程度気に入られて良く遊ぶ（と言ひ名の無理無茶をさせられた）事が多くなつた。

そんな時に袁道寺家へと華琳が招待された時オレもくつ付いて家否、屋敷へと来た。その時にオレは麗羽の従妹である美羽と出会つた。その頃はまだ生まれたばかりで遊ぶと言うよりも世話をじてや

つた。

それからだらう、オレは時折こんな手紙を渡されることがある。そして袁道寺家の広い屋敷へと足を運ぶ。ちなみに敷地面積は東京ドーム三つ分と言つのだから凄い（怖い）。

「いつ見ても無駄な歓迎だな……。何処のパーティーだよ……」

オレは愚痴を零しながら寮から駅と徒歩で来た袁道寺家の門の前に掲げられている、”夏日夜雲歓迎！－！”の文字に顔を手で覆う。それと……

「ココに來るのも久しづりね」

「ええ、そうですね華琳様」

「サッサと行きましょう華琳様！」

「…………飯……」

「恋殿もう直ぐただ飯が食えるのですー！」

「ぎょーさん居るなあ。まあ騒がしい方がウチは好きやけどな

「ふむつ。ここが彼袁道寺家の屋敷か。威風堂々とした佇まいだな

……

「はあ……少しば協調性を持てないのかしら？」

「詠ちゃん、門大きいねえ……」

「んでお前等まで来てんだよ……」

オレは後方で姦しく騒いでいる女子の軍団へと視線を向ける。其処には華琳、姉さん、姉貴、恋、ねね、霞、真、詠、月が居る。華琳達は分からなが、洛句寮組は確実にオレを尾行して来たに違いない。そんな女子集団にオレは物凄いため息を吐いて疲れた様な表情をつくる。

「あ、あのすいませんでした…。私達も今日は予定がなくて、それで……へう…」「

月がオレの正面に来てペロペロと頭を下げながら理由を語り。つい、その他人を労わる気持ちだけでオレには癒しになる、それに何でも許しちゃひせ。

「まあついて来たなりじゃーね。このまま帰すのも何だから今日だけ特別だぜ?」

オレはなるべく緩んだ顔をしない様な顔で月の頭を撫でぐる。すると月はへうと言つて俯いてしまつ。そんな姿にも僅かながらの癒しを感じてしまつ。

「だひつじや—————。」

「「」」

まあ一瞬にしてブチ壊されたが……。

「月に触るなって言つてんでしょう！ 工口魔人！」

「……お、オレが何を……した……」

折角オレが尾行の事を水に流すつて言つてるのに、脇腹に鋭い蹴りを放つて置いて敵意むき出すとか、なんと言つ悪鬼で暴君な軍師様だ……

「ふん！」

「！」べつー？』

再度オレの鳩尾に鋭い一撃がクリティカルダイナミックヒットする。それはもう、オレの頭上に文字で書かれるぐらいい。

「も、もうダメぽ……」

「や、ややや夜雲さん！？」

オレは意識がある内に指で地面を削りながらダイイングメッセージを残す。犯人はメガネツンデレ、と。

「死ね！」

「がぶふつー？」

「はあ……とんだお家訪問だぜ……。オレの周りには暴力的な女（若しくは喧しい、姦しい、体育会系）が多過ぎる…オレの身体が持たん……」

場所は変わり、オレは一人で美羽ちゃんの屋敷の一室のベッドに居る。どうやら無事に屋敷内に入れた様である。運んでくれたのは恐らく姉一人か恋、それか霞、真の誰かだらう。後でお礼をいわねえとな、と考えつつオレはベッドから出る。

「うぐつ……。…つたく…わつきのダメージもまだ抜けてねえ。…少しは手加減しろっての……」

まだ鳩尾辺りに変な違和感があり、胃の中の物が出てしまった。なる。だがそれはどうあっても避けたい。何せ今日は月の作つてくれた朝食を食べたのだから。こんな場所で吐くなど、神にお祈りする筈が、江頭2・50に祈る様な物だ（例えが今一分かりにくい気がする）。

「にしても、やっぱ広いな……」

毎度毎度ココに来るたびに思うが、一部屋が尋常じゃ無いくらい広い。プライベートルームにしてもデカ過ぎる。しかもシャンデリアまである。

「にしても、窓から森が見えるつて……変わつてねえな……」

屋敷までの道のりは2～3時間かかる。そして屋敷の周りは全て木で埋めつくされている。偶に「」は学園内なのか？と疑つ事がある程の広さと木の数だ。

「わい、それそろ行くか……」

オレはのびをしてから部屋の両開きのドアへと近付きノブをしつかりと握つてドアを開ける。すると其処にはメイドが4人並んで立っていた。そしてオレを確認すると綺麗なお辞儀をする。

「お嬢様がお待ちです。」「…………」

「あ、おひ……」

前にも「」事はあつたが流石に慣れる程の回数はそれでいいので、オレは若干じもりながらメイドに言われるがままその後ろをついて行く。

しばらく非常に長い装飾が其処ら中に施された廊下はなんだか居心地が悪い。良く解らない絵があつたり、高級そうな壺やら花瓶、古そうな西洋の鑑、床には高そうな赤い絨毯。

「オレには別世界だぜ……」

「何かおひしゃられましたか？」

オレのポソリと呟いた言葉に前を歩くメイドが聞こえたのか足を止め、オレの方を向く。

「あ。いや、なんもねえっす……」

「やつですか？」

そう言つてまた歩きはじめのメイド。オレは若干その場に固まつてから、またメイドの後を早歩き気味に追いかける。

またしばら歩き一つのドアへとオレは案内された。今までと同じ様な装飾が施されてるのに、このメイドたちはどうやって見分けているんだ？ オレはそんな事をふと思つた。

「お入りください」

「え？ あ、ああ……」

普通ここはメイドが开ける物なんじゃないのか？ と思いつつオレはドアに手をかける。まあ本場のメイドは「やつ」のものなのか。と思いオレはドアを開けた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

「ぐがねつー？」

オレの鳩尾に黄色い何かがめり込む。言わずもながらの展開である。オレは女の子に鳩尾をぶち抜かれる様な呪いでも掛かっているのだらうか？ などと疑いたくなると云つものだ。

そしてお約束通りオレの意識は無くなつた。



## 6日目 豪華な屋敷は迷路と同じ（後書き）

今回は美羽ちゃんの屋敷に到着。そして何故か+で数人がひつ付いて来た、という展開に…。

今回も前後半に別れますので、多分またしばらく待たせてしまう事になりそうです。

ではまた次回。ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8426r/>

真・恋姫†学園～夏目のドキドキ学園生活～

2011年8月2日10時43分発行